

『カール・バルト』

2016年06月03日

宮田光雄先生が『カール・バルト 神の愉快的パルチザン』を上梓している。パルチザンは武装抵抗集団のことで、ドイツ・ナチズムに抵抗したゲリラとして知られている。バルトはヒトラーの狂気の全体主義に、武器ではなく、福音主義神学に基づく希望とユーモアをもって闘った。宮田先生は、20世紀最大の神学者の一人と言われるバルトの神学の全貌を明晰に紹介している。信仰の喜びと勇気を与える本で、引き込まれて読んだ。

バルトは1914年の第一次大戦の勃発に衝撃を受け「北方でひびく砲声を聞きながら」『ローマ書』を書いた。それは「神の神たること、人間に対する神の固有の存在と主権の断固たる主張であり、人間の体験的信仰や文化的理想をふくむ被造物神化にたいする明確な否定で」、人間、思想、文化、歴史に内在する諸力に依存する19世紀の自然主義神学を否定し、神の超越性と人間の破れを主題とした危機神学の樹立であった。『ローマ書』は圧倒的な影響を与え、神学界を一変させた。

ヒトラーが台頭し、1933年1月30日、権力の座についた。バルトは、同じ年の6月25日に『今日の神学的実存』を脱稿している。神学的実存とは「われわれが神の言葉に拘束されているということ、さらにまた神の言葉に奉仕するためのわれわれの特別な召命が妥当しているということ」で、神の言葉にもとづく「終末論的保留」によって醒めた批判的な姿勢を失わないことであった。バルトは、この実存に立ち、権力と暴力で肥大してきたナチズムに迎合した「ドイツ的キリスト者」の運動を「神学的芥バケツから寄せ集められた」「けばけばしい芥屑」に過ぎないと切り捨てた。

ヒトラーに権力が集中し、巨大化していく中で、牧師緊急同盟が結成され、プロテスタント牧師の半数が加わっていた。激しく抵抗する力が潜在していた訳である。そして、バルトが起草した「バルメン宣言」が1934年5月31日、参加者139名の全員一致で採択された。「バルメン宣言」は、6項からなるテーゼで、1945年のナチズム崩壊までの教会闘争の抵抗の指針、バックボーンであり続けた。第一テーゼは「聖書においてわれわれに証しされているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一の御言葉である。教会がその宣教の源として、神のこの唯一の御言葉のほかに、またそれと並んで、さらに他の出来事や力、形象や真理を、神の啓示として承認しうるとか、承認しなければならないとかいう誤った教えを、われわれは退ける」と告白している。自明な信仰的敬虔を言い表しているが、当時の状況では自明ではなかった。ヒトラー賛美に沸き立つ時代思想の中で、明白な「不服従・否」の宣言であった。バルトはドイツのボン大学を追われ、スイスに帰国し、告白教会の教会闘争を支援し続けた。

ドイツ・ナチズムは1945年4月30日、ヒトラーの自殺によって崩壊した。同年の10月、福音主義教会の代表者たちは、「われわれは、われわれ自身を断罪する。われわれは、もっと勇敢に告白しようとしなかったこと、もっと誠実に祈ろうとしなかったこと、もっと喜ばしく信じようとしなかったこと、もっと熱烈に愛しようとしなかったことを」という言葉で、シュトゥットガルト罪責宣言を出した。

戦後のバルトの働き、未完の大書『教会教義学』について書くことができないが、下記のことを述べたい。神学生時代、バルト神学が全盛であった。しかし、神学論として読むだけで、時代と激しく交錯し、苦闘しながら神学していたことを理解していなかった。バルト神学の真意を知ってから、神学は時代の罪と向き合う営みであることを思い知らされた。神を模索することは、終末論的希望の中で、自らと社会を問うことなのである。